集会案内

中国脅威論でいいんだろうか？

――国交正常化四〇年、市民講座への誘い

加藤克子

今年は日中国交正常化から四〇周年にあたる。だが、その成果と課題についてとりあげる場がとても少ない。昨今の領土問題の軋轢をみていると、「危ういな」と感じながら、私たちはきちんと討論する場さえ持ちえていない。人びとは戸惑いの中にあると感じる。

立川シビルでは、スタッフ自らが知りたい、考えたいことをテーマにするモットーから、国交正常化四〇年の成果と課題を考える市民講座を持つことになった。ぜひご参加を！

1　国交正常化の成果と問題は

一九七二年の田中首相の訪中で実現した国交正常化の成果は大きいと思う。第一に交通が比較的自由になり、普通に訪問しあえるようになった。残留邦人の「帰国」事業は大きな進展をみた。毎年おそらく数万人の規模で日中青年交流事業が行われている。戦争史研究も現地調査や両国研究者の交流が可能になり、格段に深まった。被害者自らが訴える戦後補償裁判も「国家」の枠を越えて起こされた。

「改革開放」以降、中国との経済交流が盛んになった。今では中国ぬきの日本経済なんて考えられない。人びとは中国への旅や赴任生活の中で、活気ある隣の国の社会、若者や女性が活躍する社会を目の当たりにして刺激を受けている。

だが、交流が深まったからこそ顕在化したお互いの問題点もある。

中国の躍進と差別意識の顕在化――本屋には「中国脅威論」本がたくさん並んでいる。「アジアの盟主」意識は今も生き延びていて、「日本は中国に負けたのではない、アメリカに負けたのだ」と信じている人が多い。彼らにとって、中国の経済発展も軍備拡張も許すべからざるものである。

毛沢東、文化大革命の理想からの逸脱を指弾する人もいる。社会主義思想は今でも中国の国是だが、アメリカ民主主義があやしいのと同程度に中国の社会主義もあやしい。昨今のナショナリズムの衝突の中で、「左」の人びとにも「国益」に引き寄せられたり、沈黙を守る傾向が生まれている。

2　歴史と現在に焦点をあわせて

戦前、神田界隈にはたくさんの中国やアジア各地から来た留学生が暮らしていた。彼らを受け入れた下宿の主婦たちは、遠来の若者たちを親身になって世話したという。筆者は、そういう庶民同士の関係を持てたのに、なぜ日本は日中戦争を起こしたのだろう、という素朴な疑問を持っている。「国家対国家はそういうレベルの問題でない」という批判がすぐ返ってくるだろう。これも国家主義？

わずか六回の市民講座だから、一石を投ずる程度のことしかできないと思う。だが、この講座ではできるだけ国家対国家よりも民衆同士の関係に目を向けたいと思う。歴史認識と現在を関係づけ、私たちの暮らす今の日本社会を考える素材にしたいと思う。

第一回は九月二九日。奇しくも四〇年前の日中共同宣言調印の日になった。中国から社会科学院の歩平氏を招く。シビルに渡航費を負担する力はなく、来日のチャンスに、帰国を一日延期するお願いをした。講座は以降隔週土曜日午後二時から五時の予定。同封のチラシにある各回のテーマと講師紹介を読んでいただけるとありがたい。立川はちょっと遠いという方も、「これは聞きたい」という回への申し込みをお願い申し上げる次第である。

（かとう・かつこ／立川シビル）

［問い合わせ・申し込み先］
立川シビル：TEL&FAX042-524-9014（平日午後一時から七時）